

江戸時代の竹宮村—『肥後国志』を読む—

藩政時代、このあたりの様子がどのようなものであったのか、それを正確に知ることはできません。しかし、正確ではなくとも遺された文献等からある程度の様子は分かるのです。分かるというより想像できると言った方が適当でしょうか。

ここに、『肥後国志』(明和9年[1772])という地誌があります。この書物は森本義太夫一瑞という熊本藩士が著したのですが、明治17年に活字化され出版されました。それは県立図書館で読むことができます。その『肥後国志』に次のような記述があります。

神蔵庄

竹宮村 高六百石余 里俗竹宮本村ト云

竹宮原 渺々タル原野畑也 詫磨原又龍ノ原共云 詫磨原合戦ノ地也 土俗ノ説上古阿蘇明神数鹿流ヲ蹴透シテ阿蘇湖ヲ干給ヒシ時 湖二栖ル龍 或曰蛇 此所二流来テ死セシ故龍ノ原 又蛇ノ原共名クト云

ここにいう竹宮村が健軍村のことですが、江戸時代の文書では竹宮と云ったり健軍と云ったり統一を欠いています。村内に健軍神社がありこれは音読みでケングンです。しかし音読みの村名というのは馴染めなかったのか、これをタケミヤと訓読みにしたのですね。健はタケと訓じますが軍にミヤという義があるのかどうか、少なくとも広辞苑には載っていません。したがって苦しいヨミカエだったように思います。森本一瑞はこのことを次のように書いています。「軍訓美夜其故未詳」(軍をミヤと訓ずるその故未詳)つまり、「健軍」をどうして「タケミヤ」と読むのか、その謂われは分からないと云うのです。

神蔵庄という文字を冠して竹宮村とありますが、神蔵庄とはこの土地の出自を表すもので、もとは健軍神社の御神領(荘園)であったと云っているのでしょうか。この竹宮村は広大な村域をもっていました。現在の校区名で拾ってみると、若葉校区・泉ヶ丘校区・東町校区・健軍東校区・山之内校区・月出校区・尾上校区・帯山校区・健軍校区等が含まれます。これら校区のなかで戦前からのものは健軍小学校のみです。村の石高はわずか600石です。水田の面積で云えば30町歩に足りないのです。どのくらいの戸数・人口を擁していたかは『肥後国志』には書いてありませんが、明治初期の調査『明治前期の郡村史抄[熊本県立女子大歴史学部編]』に次のようにあります。戸数433戸、人口1988人。

『肥後国志』が編纂されて100年ばかり経った明治8・9年ごろの調査でこの数字です。この地域の土地の生産性がいかに乏しかったかを物語っています。それというのもこの地一帯は台地で灌漑の便がなく米作ができなかったことによるのでしょうか。「渺々タル原野畑也」とあるように村の面積の大きな部分を原野・畑が占めていたのです。そこは詫磨原とよばれ南北朝時代には北朝方の今川了俊と良成親王を奉ずる南朝方の菊地武朝が戦った戦場にもなったのでした。また地名の由来が「鯰」「六嘉」と同じく阿蘇神話からきているのもおもしろいですね。

『明治前期郡村史抄』に記載されている事項に学校があります。「学校 二箇所。一八本村ノ坤(ヒツジサル・南西)ニアリ、生徒数男九十八人、女六十二人 一八本村ノ東字新外ニアリ、生徒男三十二人、女八人」とあります。この「本村ノ坤ニアリ」という学校は現在の健軍小

のことです。健軍小の創立は明治8年ですからこの時点で学校といえば健軍小のことです。その場所は市の教育委員会文化財保護課に問い合わせたところ、市電動植物園前、庄口公園附近の小高いところに真宗寺というお寺がありますが、その寺内にあったそうです。一方字新外にあった学校というのは同課の話では当時「人民共立小学校」と称したそうですが、場所、廃校までの経緯等については何も分からないということでした。

竹宮村には本村の他に外村・東外村・西外村・下村・新外村があり、これらが合併して明治9年に健軍村となりました。健軍村の役場庁舎は電停「健軍校前」南側にある現在の「JA健軍」にありました。このことから、竹宮村の中心地は現在の健軍4丁目あたりで、往昔下村と称した所です。では、健軍商店街やわが若葉校区が何村にあったのか、これがはっきりとは分からないのですが、昭和前期の地図を見ると若葉校区、泉ヶ丘校区には集落の記載はなく、おそらく下村に隣接する畑ないし原野であったものと思われます。